

母子分離不安を背景とした不登校児童への折衷的アプローチ

佐藤 昭雄 教育学部附属教育実践総合センター

要旨

小学校低学年の母子分離不安を背景とする不登校児童への母子並行面接の事例研究である。第Ⅰ期は行動主義的アプローチを採用し、早期に再登校を果たす。第Ⅱ期は、父親代わりの祖父の死により高まった不安ゆえに、再び母のもとを離れられなくなったA男のメンタルケアを中心とした支持的面談と箱庭を展開。第Ⅲ期は、母親のメンタルケアを中心とした面談の展開によって、母子の間に適度な距離感が生じ、相互に自立し、終結を迎えたケースである。

【キーワード】 分離不安 不登校 行動主義 支持的面接 箱庭 外在化

1. 事例 A男(来談時小学校1年生)

2. 主訴 不登校

3. 概要 家族構成は、祖父母、母(パート)、兄(小5)、本人の5人家族。

出産や生育歴等に特に問題なし。父とは、本人が4ヶ月の特別居し、3歳になる時に離婚。3歳で幼稚園に行くが、最初登園渋りがみられる。しかし、まもなく幼稚園に適應。母によると、性格的には「トロいが、図太いところもある。」ということであった。

1年生の6月末頃、「学校へ行きたくない。」「おなかが痛い。」と訴えるが、途中まで母が送っていくと行けた。しかし、2学期に入ると、始業式は行ったものの、次の日から全く行けなくなった。身体症状も頭痛・腹痛から嘔吐まで見られるようになり、9月上旬、市内の心療内科に通うが、「精神的なもの」「学校にはがんばって行ってください。」と言われたということであった。

4. 面接経過

第Ⅰ期 行動主義的アプローチによる再登校

X年9月下旬、小学校長の勧めで、母親来談。インテーク面接で生育歴や家族構成、不登校に至るまでの経緯(上記概要)等をうかがう。母親が言うところによると、「兄と近所の小1の子と一緒に登校しているが、自分は早く行きたいのにその子と時間が合わず、一緒に行くのが嫌なのではないか」ということであった。

X年10月中旬、母子来談。来てすぐに本人は箱庭に興味を示し、「やりたいの?」と聞くと、頷き、「いいよ」と言うと黙って作り始めた。本人は、作りながら時々母親の方を確かめるように見てはまた作るということを繰り返していた。やがて明るい表情と笑顔を見せ始め、約1時間かけて完成させた。〈全体的に雑然としたにぎやかな箱庭で、右端中央にトンネルがあり、蛇が1匹右上に出ようとしている。またすでに外に出た蛇は、右上隅のガンマンに襲いかかろうとしている。2匹の蛇が象徴する

ものとして考えられるのは、自分の中にあって意識化されていない力、それが動き出すことによって自分自身不安になると同時に、周りも混乱させる恐れを感じさせる。トンネルは、家庭・母性的な世界から、外界・父性的世界への通路と考えられる。中央に、ブランコに乗る牧師（A男の自分イメージか）、右隣にシンデレラ（母親イメージ）、左隣に戦士（兄イメージ）がいるのが印象的。左上のコンビニに飛行機が止まるなど現実検討能力は弱いと思われる。）



その後、本人に話しかけると「学校は嫌いじゃないけど、勉強は嫌い。」「担任はおもしろい。」「お母さんは大好きだけどちょっと怖い。」「母が仕事するのは嫌じゃないけど寂しい。」「近所の子といっしょに行くのは嫌だ。」などと話してくれた。本人が母親との会話をしばしば遮るので母親とは十分話ができず、後日電話をもらうことにした。（電話で、お母さんの気持ちを確かめながら、家庭での愛着行動を増やすこと、身体症状が治ったら段階的な同伴登校をしてみるなどをお願いし、しばらく経過観察をすることにした。やがて、お母さんから、自分と一緒になら学校に行けるようになりましてと電話連絡が入った。）

X年 12 月上旬、母親から電話。「教室まで行けるようになったが、自分（母親）から離れない。」ということで、来談を希望。

X年 12 月中旬、母子来談。本人はまた箱庭を作り始める。〈1 回目の箱庭に比べ、少し整理された印象。中央を上下に置かれた並木によって左右が分断され、右側には学校や家や交番、コンビニなどが整然と並べられている。特に、学校の屋上には男の子と女の子が乗っており、男の子は「自分」で、女の子は「先生（担任は男性）」だと言う。左側には柵で区切られた複数のエリアの中に、動物などが入れられており、動物園のモチーフである。ここにおいても 2 匹の蛇が対峙し、エネルギーや衝動のうごめきを感じる。境界は並木で強固とは言えず、まだ不安定さを感じさせると共に、分断から統合へのプロセスの必要性を感じる。〉



母親から、学習発表会を契機に教室に復帰したこと、朝は 7:30 頃母親と 2 人で学校に歩いて登校し、その後母親同席のまま教室で終日授業を受けていること、病院は身体症状が無くなり再登校できた段階でやめたことなどが話された。また、母親から本人が離れないことについての心配が語られたので、「前回、お母さんがこちらにいらっしやった時は、A男が学校に行けないことを心配していましたよね。でも今はAくんは学校に行けるようになりました。」「いまのこの状態（母親から離れない）も、2年、3年と続くとは思えませんから、今まで通り愛着行動を増やしながらか、本人が不安にならない程度に、ゆっくりゆっくりと教室の外、次は校長室（保健室）、そして中抜け、玄関までと急がず段階的に離れていってください。」とお願いした。

本人との面談では、「学校は楽しい。」と言い、「友達もいる。」と数人の名前をあげた。勉強の遅れはあるものの、取り返そうと家で自主的に宿題をやっているとのことであった。

第Ⅱ期 祖父の死による状態の逆戻りと再起

X+1年2月下旬、母親から電話があつて母子来談。2学期の終業式に1人で学校に行け、周囲も本人も喜んだものの、冬休み中に祖父(母が離婚しているので、父親代わり)が死亡したことを契機に、また母親から離れられなくなったという。学校においても以前の状態に戻り、母親と2人で登校し、母親は終日教室の後で本人とともに授業を受けているということであった。ただ、本人は学校そのものへの拒否感はなく、楽しげに学校での様子を箱庭を作りながら話してくれた。〈上下で風景が全く異なり、上左隅には駅と新幹線、右端には柵で囲まれた中に魚とガラス玉が置かれている。下方には、左から柵に囲まれた蛇2匹、恐竜3匹、象3頭と置かれ、上方に比べてにぎやかである。置かれている新幹線や動物たちはすべて右向きで、外側へのエネルギーを感じる。〉しばらく、1週間に1回の継続面談をすることにした。



X+1年3月上旬、母子来談。今日は、朝母親と登校したものの、兄がインフルエンザで休んでいるので、母親が本人を置いて帰ろうとしたら、本人が離れず、結局一緒に家に戻ってきたとのことであった。本人にそのところを聞いてみると、「寂しい」とか「不安」という反応であった。そのせいか多少元気が無い様子であった。〈2回目、3回目の箱庭に比べてかなりにぎやかな箱庭である。特徴的なのはレールによるアーチや、レールのはみ出しである。また、箱庭全体が動物園モチーフであり、整然と区画されている姿や、四隅の木の配置など、まさに曼荼羅を思わせる。特徴的なのは、一つ一つの柵にすべて左向きの人物が配されている点である。アーチやレールは外へつながるものをイメージさせる。また、動物の柵の中の姿は、衝動や思慮のなさを象徴する動物を、理性の象徴としての人間がコントロールしているようにも見える。ただ、はみ出しの様子から、収めきれしていないエネルギーを感じ、このままではまだやっていけない印象を受ける。〉



X+1年3月中旬、母子来談。今週は、母親が風邪気味であるということで、時折、母親が本人の側を離れることを認めてくれたということであった。今回は箱庭以外に、自分でずぐり(独楽)を持参し、私にやり方を教えてくれた。〈前回ははみ出しは無

くなり、中央付近に上下左右にひらくアーチが作られている。左側には、上から、柵に入ったヨットや自動車のエリアがあり、柵に入ったタンクローリー、門が開かれた飛行機が2機置かれている。中央上辺には右向きの新幹線が3台置かれている。アーチをくぐった右側には、上に14対の騎兵隊とインディアンの対決、下には上向きの蛇が2匹柵の中に置かれている。騎兵隊とインディアンの対決は強制と調和、合理性や生産性と伝統や習慣の葛藤を感じさせる。2匹の蛇は、本児の一貫したモチーフで、未分化な生命力やエネルギーの象徴と考えることができる。)



X+1年3月下旬、母子来談。本人が終業式に1人で学校に行けたことを得意げに話してくれた。母親もうれしそうであった。今回箱庭はやらず、ずぐりを私に教えながら自分でも熱心にやっていた。また、遊具の自動車に乗りたがり、乗せてあげると大喜びで、何度も乗って遊んでいた。年度末でもあり(私の転勤も予想されていた)、状況も改善していることから一旦終結とし、また何かあったら連絡してくれるよう母親にお願いして相談を終えた。(幸い転勤も無く、その後、学校長の方から、4月始業式から元気に登校し、母親なしでもやっていけているという報告をもらった。)

第Ⅲ期 再度の不登校からのアプローチ

X+1年12月上旬、母子来談。11月後半、約8ヶ月ぶりに学校長から電話があり、発熱で3日間の欠席を契機として登校渋りが始まり、また以前のような不登校状態となっているので、面談をお願いしたいということであった。

最初、母親と本人と同じ部屋で面談をしたが、本人が話しづらそうにしていたので、別室に母親を待たせ本人と面談。本人は、隣の席の女の子2人が、「口が臭い」「あっち向いて」などと言われ辛いと訴えた。また、勉強も、国語の文章と算数の図形がわからないと言う。(母親とは後日、電話連絡によって今後の対応を相談。また、学校長には、本人の勉強の遅れが背景にあると予想されるので、担任等による個別指導をお願いした。)

X+2年1月中旬、母子来談。本人に「今日は何する?」と聞くと、「車に乗りたい」と言うので、相談補助員にお願いして相手をしてもらい、母親と面談。始業式は朝から帰りの会まで教室に居れた。本人が通知票を直接先生に返したいと言う。始業式の次の日は、学校へ行くのに手こずる。なんとか登校し、3時間目の体育には出る。週明けの月曜日は、教室には入れないものの、保健室に母親と一緒にいて、給食を食べ午後まで居た。冬休み中、吐くので県病へ行ったが、「精神的なもの。」と言われたという。母親との面談終了後本人を迎えがてらプレイルームに様子を見に行くと、汗を流しながら楽しそうに遊んでいた。

X+2年1月下旬、母子来談。本人はまた相談補助員と車遊びをし(以後、本人とは相談補助員が相手をし、母親中心の面接となる)、母親と面談。朝の登校渋りはあるものの、学校に行くには行くという。保健室に友人が迎えに来ると、一緒に出て行ったりもする。相変わらず調子が悪いときには、吐いたりもするという。そこで、母親とは「吐き虫」(ブリーフの外在化)の話をする。

X+2年2月上旬、母子来談。先週木曜日からは、朝から登校するようになり、調子もよいということであった。母親が体調を崩したこともあり、兄に連れられて登校したり、教室に入ったりする様子も見られた。そのせいか多弁で明るいとのことであった。昨日の節分では、自分で作った鬼の面をつけて、家で豆まきをし、自分は「学校に行かない鬼」だと言って母や兄から豆を投げつけられていたが、「鬼は外」と言われると、「まだ、行かない。」と叫ぶなど、本音をのぞかせながら笑いをとっていたという。

X+2年2月中旬、母子来談。先週よりも穏やかな様子で、無理が感じられない表情。朝は遅刻ぎりぎりながら、母と近所の子といっしょに登校（母親は送り届けたら帰宅）。一旦保健室に入るものの、友人が迎えに来ると楽しそうに出て行くという。あとは終日教室にいて、帰りまで居るといふ。母親も表情が明るい。この頃から、話の中心は本人よりは母親の話となる。

X+2年2月下旬、母子来談。今日は兄と2人で登校。昨日、母と入浴中に「明日、ぼくお兄ちゃんに行く。」「ママは来なくていい。」と言う。半信半疑で翌日を待ったら、1人で起きて本当に行ったという。後半、母は離婚の経緯を話してくれる。

X+2年3月上旬、母子来談。先週から母親なしで登校。表情も明るく楽しそうに遊んで帰る。母は、自分の性格や生い立ちを振り返る。

X+2年3月中旬、母子来談。母無し登校2週間目。今日は卒業生を送る会で、代表で挨拶をしたことを得意げに話してくれた。学校での交遊も、女友達から男友達に移ってきたということであった。

X+2年3月下旬、母子来談。そろそろ終結を考えてもよい時期であったが、新学期が少し不安なので、新学期若干のフォローアップ面接をすることにした。

X+2年4月中旬、母子来談。始業式から元気に登校したものの、父方の祖母の死でペースが乱れたようで、少し不安定となる。

X+2年5月上旬、母子来談。最近では1人で登校しているものの、まだ替わった担任（前担任が転勤）や級友（クラス替え）との関係が弱いようで、多少の登校渋りがみられるとのこと。

X+2年5月中旬、母子来談。今週は楽しく登校しているという。だいぶクラスにも慣れてきたようで、次回で終結とすることを母親と本人に伝える。

X+2年5月下旬、母子来談。6月上旬の運動会を目標に、毎朝早起きし、近所の子を連れて毎日登校。表情も明るく、活動的で、センターでも一生懸命遊んでは汗を流していた。登校も安定してきたので、フォローアップの面接も終え、終結とした。

5. 考察

今回のケースは、小学校低学年の母子分離不安という見立てをしたので、第Ⅰ期は行動主義的アプローチを採用した。背景には、比較的安定した母子関係や、母親がパートをやめることを考えていて協力を得られやすかったことがあげられる。また、本人の性格や過去の乗り越えの体験、さらには学校や担任に対するポジティブなイメージや学校側の協力も資源と考えられた。しかし、なによりも本人及び母親のニーズや発達段階から考えて、早期の再登校が重要と考えられたからである。

しかし、初回からのいきなりの提案は、情報不足や関係不足が否めないもので、とりあえず母親が不登校の原因とした、「近所の子」への母親自身の対応策（迎えに来た近所の子をやり過ごし、あとで母親と本人が2人で登校するというもの）を実践して

もらい、その結果を2週間後に報告してもらうことで、次回面談につなげた。その結果、近所の子をやり過ぎしても本人は学校に行かず、2回目の面談には母親が本人を伴って来談することになる。そこで、2回目の面談の観察や話の内容から、行動主義的なアプローチの提案をし、実行してもらった。その結果、早期の再登校にこぎつけることが出来た。

しかし、予想されたことではあるが、母子に対するメンタルケアが十分とは言えず、祖父の死というエピソードを契機に状態が逆戻りしてしまった。(箱庭については、本人が望み自発的に取り組んだので、あくまでも遊びの道具として活用した。ただ、事例終結後、事例の振り返りのため、県立保健大学教授入江良平氏の指導のもとにまとめさせていただいた。)

第Ⅱ期は、父親代わりの祖父の死により高まった不安ゆえに、再び母のもとを離れられなくなった本人の心情を理解し、本人のメンタルケアを中心とした支持的面談と箱庭を展開した。本人の精神的な安定につれ、学校での状態も好転し、センターでの遊びも箱庭から自分で持参した遊具(独楽)、そして自動車へと移っていった。

第Ⅲ期は、2年生の4月から11月まで(8ヶ月間)普通に登校していた本人が、対人トラブルを契機として不登校となったもので、当初は第Ⅱ期と同様のかかわりで事態の好転をはかろうと考えた。しかし、以前と明らかに違ったのは、本人が母親から離れることにあまり抵抗感を示さなくなったことと、母親の落ち込みが大きかったことである。そこで、第Ⅲ期は、母親のメンタルケアを中心とした面談を展開することにし、本人とは、面接の最初と最後に軽い面談を入れ、気持ちや状態の確認をする以外は、相談補助員とともにプレイルームで思いっきり遊んでもらうことにした。(本事例は、あくまでも小学校児童の不登校を主訴としたケースゆえに、児童中心の記述を心がけ、母親自身のことについて語られた内容には言及しなかった。)

その結果、母親の精神的な安定が、支持的な面談等によってなされ、問題や子どもとの適度な距離感がブリーフ的な技法等で構築されたこともあり、母親自身の子離れも促されて、本人の安定登校につながったものと考えられる。一方、本人においても、相談補助員との遊びによってストレスを発散し、学校側の柔軟な配慮によって、居場所を確保しつつ活動性を高め、交友を広げていったことが解決に大きく貢献していると言えるのではないかと思う。

参考文献

- 河合隼雄・山中康裕編著 1982, 箱庭療法研究1, 誠信書房
- 福島脩美・田上不二夫・沢崎達夫・諸富祥彦編 2004, カウンセリングプロセスハンドブック, 金子書房
- J・J・マーフィ, B・L・ダンカン 市川千秋・宇田光監訳 1999, 学校で役立つブリーフセラピー, 金剛出版
- 山本力・鶴田和美編著 2001, 心理臨床家のための「事例研究」の進め方, 北大路書房
- 森俊夫 2001, 「問題行動の意味」にこだわるより「解決志向」で行こう, ほんの森出版